



▲2011年3月12日 釣師浜（新地）の日の出

● 地震があつた日から、職員が24時間勤務態勢になつた。その日、自宅に戻ることができたのは夜中の1時頃だった。不規則な時間で仕事をし、家と職場を行き来するだけの日々が続いた。子供達三人は、祖父母が学校へ迎えに行つてくれていたので、無事に家にいて安心したことを覚えている。

私の勤務の関係で家族は避難をせず、家で過ごしていた。今考へても、毎日家にいて情

ままの不安な状況だつたと思う。

30

高相

わかこま
Web

県立相馬高等学校
出版局

元年度第30号
令和2年3月11日(水)
編集人 山本 風佳
発行人 長嶌吉種子

きな地震が発生、急いで裸足のまま孫たちを安全な場所に避難させた。雪も降り始め、刃りは暗く寒くなりとても辛かった。

地震が収まり家に戻ると、茶箪笥が倒れ悲惨な状態になっていた。炭で暖まる堀りごたつを用意したり、風呂に水をためたりしてこれからに備えた。原発が爆発したのを知り、放射線を気にして畠の野菜を収穫し倉庫に入れた。

今まで感じなかつたが、電気と水は本当にありがたいものだと痛感した。

行つた。次の日自分で地元に帰るときは子どもたちが泣きじやくり、行かないでと全力で手や足を引っ張つてきた。辛かつたけど今思うと大切な経験をしたなど思う。

(新地町在住・40代男性)

役場勤務・40代男性

● 地震当日は原釜にいたので、園児を避難させることで精一杯だった。地震の後、続々と保護者の迎えが来た。津波が来ると知つて、迎えが来ていないうちを保育園の屋根にしきごで避難させるとい津波が家や船などと一緒に流れてきて、目の前の松川浦に里生活はできなかつたがそれでも工夫して便利にすごそうとする家康の姿を見て嬉しかつたがつらいことも多かつたけれど、重要な経験になつた。

事でお世話になつた主を亡くし、あまりに突然のことが次々と起きて何も考えられない死の日々が続いた。

4月に入つてからふと見たアーティクトの歌に励まされことを鮮明に覚えている。そのアーティクトは今も変わらず好きで、私の人生を少なからず教えてくれた存在だと感じる。

宮城県に自主避難したときは電気も水も

と同時に今度は自分が

●正直なところ、震
からもう9年経つと
う実感があまりない
当時はまだ小学生で
2歳下の妹と一緒に
校にいた。そのとき
んでいた家が古かつ
こともあり、家に一
でいた祖母、それか
飼っていたペットの
とをすごく心配した
とをよく覚えている
妹はよく泣く子で、
姉ちやんだから何と
しなきやいけない状
だつたのに、妹に何

必死で園児と向陽中に避した。そんな中、全ずぶ濡れでお迎えに来てくれたお父さんもた。一緒にいた園児最後の子を受け渡す一安心はしたが、そと同時に今度は自分家や家族が心配でたらなくなつた。一夜だけ、家族に会えたとはとても安心して緊が和らいだことをはきり覚えている。

表れ災い・。住た人ここら況かお。●東日本大震災から10代女性（相馬市在住・学生）の感想

放射線を気にするようになりました。家の近くで採っていた山菜も食べなくなつた。生活が変わった。目に見えない放射線におびえ過ぎるのは当時の私は衝撃的だつたし、学生ながらにストレーキを感じた。

その後1年間仮
宅で過ごしたが、
亡くしたつらさと
からの不安で生活
んどく、苦しいもの
た。今は結婚して
になる息子がいる
母にも見せてやりた
たなどは思う。

A photograph showing a large fishing boat tilted onto its side on a sandy beach. The boat is white with blue trim and has several yellow buoys attached. In the background, there are some buildings and other boats, all appearing to have been severely damaged by a powerful force.

設住母をこれはし
だつだつ友達には津波で
1歳が、かつなつた人もいた。
かつ週間に授かつ治療の末、地震
どもを失つた同や消防団で避難
をしていた際にに巻き込まれた
のことを考えると
も心が痛む。
●怖かつたね、あ
大きい津波は初めて
たよ。うちは目の
海だからすぐに津
心配をしたね。ま

▲原釜（相馬）の陸に打ち上げられた漁船
亡く
は皆驚いていたが
付けをして診療を
た。津波が来てい
とは全く知らなか
所にいると聞いて
に行つた、原町の
と両親は無事で安
た。いつ避難して
いように準備もし
た。
数日後の夜中、
の親戚が来て、原
爆発したと聞き空
親戚の家に避難し
小学校がいつ始ま

3月11日は福島県に未曾有の災害が起きた日であります。私たちはこの災害を忘れずにいるために、昨年と同様このような紙面を作りました。残念ながら今年は新型コロナウイルスの影響で休校となつたため、ウェブ上でのみ発行となつてしましました。

昨年は相高の生徒や生方の記憶を載せました。が、今年は家族や周りの大人の記憶を取り上げました。私たち子どももが不安だったとき、大人もまた不安だったことに改めとを考えます。

今まで当時とは違つた不安の中にはいますが、できるだけ冷静な行動を心がけていくことが大切だ

が、片
続け
たこ
つた。
かつたものの、墓石が
あつちやこつちやして
てね、安全とは言えな
かつたんじやないかな
余震の度に身体が震え
ていたよ。

でも、良い経験になつ
たんじやない？みんな
「当たり前」のありがた
たみがわかつたでしょ
う。

(新地町在住・無職
70代女性)